

## 第2分科会

座間市教育研究所

田中 貴彦  
江口 千恵  
石井 かなた  
山口 夏実  
市川 麻絵

発表テーマ

小中連携を目指した外国語授業の在り方

### 1 研究の経緯

この研究会は平成28年度に発足し、小学校教諭3名と中学校教諭1名のメンバーで研究がスタートした。新学習指導要領移行期間により、座間市では今年度から小学校3・4年生で外国語活動が始まり、5・6年生では教科としての外国語に向けて教育課程が進められている。小学校で英語の基礎的なスキルを身に付けた上で、中学校で英語を学ぶ子どもたちのために、今後より一層の小中連携が必要になる。しかし、小・中学校の教員同士が、どのような外国語授業を行っているか、互いによく知らないという現状があった。そこで「小中連携を目指した外国語授業の在り方」をテーマとし、互いに授業参観を行うことから研究をスタートした。

### 2 研究の内容

#### (1) 授業参観の視点

お互いの授業を参観する上で、スーパーバイザーである東京学芸大学教授の粕谷恭子先生のアドバイスも参考に、小中共に持つべき視点を二点設けた。一点目は「活動の質」、二点目は「コミュニケーションの素地」である。「活動の質」では、「子どもが『伝えたい』と思って伝える」「子どもの思いを大切にされたコミュニケーションの場面を設定することができているか」という点に着目した。「コミュニケーションの素地」については、「音声を丁寧に聞かせること」「小学校でもある程度、文法を意識して授業を行うことがどれだけできているか」に着目した。

#### (2) 授業参観後に挙げた課題点や疑問点

まず「活動の質」について、小学校ではゲーム中心の活動が多く、発する音声と活動内容が噛み合っていない場面が多く見られた。中学校では、ペアワークの場面で型にはまった会話をしており、

「やらされている感」が否めない実態があった。

「コミュニケーションの素地」については、小学校では授業の雰囲気大切にあまり、教師が文法の間違えを指導しない場面が多く、課題として挙げられた。

#### (3) 授業実践と考察

① 小学校5年生の実践…「What do you like?」の単元の導入場面と、小学校5年生「What's this?」の単元の導入場面では、どちらも行動と音声一致していない箇所があり、よく考えると不自然である、という反省点があった。ゲームや勝ち負けのある活動は子どもにとっては楽しい一面もあるが、正しい文法や音声でいうことを大切に、子どもが英語の表現自体を楽しく学べるよう配慮する必要がある。また、正しいコミュニケーションの力を身に付けさせるためには、教師がなるべくフルセンテンスの英語を子どもに聞かせることが大切である。

② 小学校6年生の実践…「Turn right」の単元で、様々な場所の言い方に触れている場面では、教師が事前に現地に行き、実際の場所や建物を写真に撮ったものを黒板に示すことで子どもの興味関心を高めた。反面、授業準備の負担の大きさも課題に挙げられた。普段の外国語授業で、教師は自分の英語力や授業内容に自信がないあまり、必要以上のカードや道具を用意して盛り上げようとしがちだが、本当に大切なのは、準備物を増やすことではなく、活動の質を高めて子どもを授業に引き込むことだと考えた。

③ 中学校1年生の授業実践…季節と月の表現について指導している場面では、中学校1年生で扱う内容の中には小学校段階で一度慣れ親しんでいる表現もあるということ教師が把握し、既習事項を生かして子どもの力を効率よく引き出すことが大切だと改めて認識できた。

#### 3 成果と課題

小学校における外国語活動は、とにかくゲームの楽しさに授業が偏りがちな面があるが、他教科と同じように、内容自体に学ぶ楽しさがあり、それを子どもたちにつかませることが大切である。研究員として授業実践を重ね、研究を深める中で、多くの教員に外国語授業の在り方について認識を深めてもらえたことをうれしく感じている。一方、小学校で学んだことが中学校でうまく生かされていない現状がある。新学習指導要領を深く理解し、子どもたちにとって真に楽しい授業をめざし、更に有意義な研究を進めていきたい。